

音楽

DVD版 全4枚・別冊1

関連図書のご案内

表示価格はすべて税別

定価
本体価格 240,000円+税

(ISBN978-4-8350-7098-8)
(別冊分売可 定価2,000円+税 ISBN978-4-8350-7099-5)

画像点数 約6,700枚 (13,000頁相当)

収録データ形式 PDF

原本提供 PDF

東京藝術大学付属図書館

発行

東京音楽学校学友会

細川周平 (国際日本文化研究センター・教授)

刊行

2013年1月

- 内務省警保局編 (大正14年～昭和19年刊)
 - A5判・上製・函入・総23、200頁
 - 撮定価 520,000円+税
- 解題 牧野守
- 推薦 家永三郎・内川芳美・佐藤忠男・篠田正浩・富士田元彦
- 「映画検閲時報」は月報形式で、毎月「查閲フィルムノ部」「制限ノ部」「輸出ファイルノ部」「附録」に分類され、映画の題名・卷数・製作費・および検閲の内容・制限事項等が記録されている。戦前期に製作された全映画についての唯一の全体的な検閲記録である。

小山内薰・土方与志ほか編 (大正13年～昭和5年刊)
築地小劇場 全63冊・別冊1・付録1

- A5・菊判・並製・函入・総約4,000頁
- 撮定価 87,000円+税
- 別冊II解説 (祖父江昭二)・総目次・索引
- 付録IIボスター4枚・プログラム7枚
- 推薦 飯沢匡・千田是也・滝沢修・松本克平・水品春樹・山本安英

大正一三年、小山内薰・土方与志の手で創設された築地小劇場。その機關誌「築地小劇場」は、近代演劇史の研究家にとって貴重な文献であるばかりでなく、近代演劇の原点として、芝居を志す人、舞台に情熱を傾ける人必読の資料である。

内務省警保局編 (昭和3年～昭和19年刊)
出版警察報 全40巻・補巻1・付録1

| 別冊 | Disc | 原本号数 | 発行年月日 |
|----|------|----------------|------------------|
| 1 | 1 | 第一巻1号～第3巻12号 | 1910年1月～1912年12月 |
| 2 | 2 | 第4巻1号～第6巻12号 | 1913年1月～1915年12月 |
| 3 | 3 | 第7巻1号～第9巻12号 | 1916年1月～1918年12月 |
| 4 | 4 | 第10巻1号～第13巻12号 | 1919年1月～1922年12月 |

※原本体裁 1巻II A4判／2巻～4巻II B5判／5巻～13巻II A5判
発禁および注意処分、新聞記事の差止通牒調、主要新聞雑誌の記事内容、外国の出版事情、1935年以降はレコードも含め細大もらさず記録しマル秘文書とした唯一月報形式の資料である。

音楽

DVD版

〔東京音楽学校学友会 発行〕

日本における近代音楽の歴史をひも解く貴重資料をDVD版で再現！

画像点数約6,700枚 (13,000頁相当)

楽譜、詩歌、評論、講義、戯曲翻訳、公演

国内外の音楽情報など充実の収録内容！

DVD全4枚+別冊 (総目次・索引)

本体価格 240,000円+税

2013年1月刊行

●収録

明治43年1月～大正11年12月
(第1巻1号～13巻12号)



不二出版

不二出版

〒113-0023

東京都文京区向丘1-2-12

電話03-3812-4433

ファクシミリ03-3812-4464

振替001600294084

2012/12

內容見本

左上／「目次」(1巻1号)
上／「紐育より」(山田耕作) (9巻11号)
右上／「海内外」(11巻7号)
右／「『音楽』に望む」(1巻2号)
下／「憾」(滝廉太郎遺作) (1巻5号付録)

●主要寄稿者一覽

青柳善吾
 阿部次郎
 市川彩
 猪瀬久三
 上野直昭
 牛山充
 内海信之
 大熊信行
 大田黒元雄
 多久寅
 和田愛羅
 岡本新市
 小川未明
 小草露子
 小倉末子
 小田島次郎
 乙骨三郎
 柿沼太郎
 兼常清佐
 北村季晴
 黑田誠
 金健二
 草川宣雄
 斎藤佳三
 小林愛雄
 近衛秀磨
 北村久雄
 金城昌平
 塩見競
 滋野清武
 志田義秀
 島崎赤太郎
 霜田史光
 白鳥省吾
 相馬御風
 鈴木賢之進
 高辻秀宣
 高野辰之
 高橋均
 エルンスト・エルターライン
 ローレンス・ギルマン
 アントン・チエーホフ
 ウィリアム・ブレイク
 ヨゼフ・ホフマン
 田辺尚雄
 田村寛貞
 橋糸重子
 辻村直
 外狩伸七
 德川頼貞
 富田碎花
 内藤濯
 長坂好子
 中田章
 永田竜雄
 長橋熊次郎
 並樹秋人
 萩原英一
 秦豊吉
 服部駿郎次
 服部嘉香
 林古溪
 弘田竜太郎
 福島琢郎
 藤井清水
 二見孝平
 保科寅治
 前田夏村
 前田春声
 星川清雄
 宮原楨次
 松尾孝輔
 三木露風
 前田
 本居長世
 森田白楊
 柳沢健
 梁田貞
 山崎栄堂
 山田耕作
 湯原元一
 横山弁人
 吉丸一昌

刊行にあたつて



雑誌『音楽』は、現在の東京芸術大学の前身である東京音楽学校学友会が発行していた月刊誌である。学友会発行の雑誌であるため、卒業生の消息や活動、報告記事も掲載されているが、会員を広く一般から募り、国内外の音楽の状況、演奏会の告知・評論、琉球音楽の紹介、文楽といった日本の伝統的な音楽に関する記事も掲載され、発行を重ねていくにつれて「音楽総合情報誌」として充実していく。

「赤とんぼ」の三木露風とその門下生、「浜辺の歌」で知られる林古溪、「馬酔木の花」の永田龍雄らが作品を発表しており、日本語の詩に西洋音楽の形式によつて作られたメロディーをつけた「唱歌」の黎明と、発展、普及の様相を知ることができる。さらに、評論・研究、海外事情の報告者（投稿者）の中には、後に音楽評論家として活躍した大田黒元雄、牛山充らが名を連ね、当時だれもが見聞きしたことのなかつたヨーロッパの楽曲をだれがどのように鑑賞し、紹介していたのかを知ることもできる。

作詞吉丸一昌）の初稿譜も収載され、日本人の西洋式音楽の創作の足跡が刻まれた本誌は、近代日本において西洋の伝統文化をどのように眺め、取り組み、取り入れようとしてきたかをひも解くための一次資料である。

辯が深められたが、「音楽」の文芸欄も充実している。内藤濯のフオーレ、歌曲やワグナー論や、山田耕作と協力した美術家、斎藤佳三がハイフェッツに捧げた詩もある。伊庭孝、萩原朔太郎、小川未明、秦豊吉、白鳥省吾、大熊信行、富田碎花、柳沢健、阿部次郎の署名が見える。先端的な大正文化人がどのよう うに〈上野〉とつながりを持ったのか、今後の解説が必要とされる。

二十数年前、同誌をまるで未知の鉱脈を掘り当てたかのように興奮しながら、読みまくつたことを思い出す。その頃に比べ、近代日本音楽とい う研究分野はずいぶん充実した。このDVD版がそのさらなる発展に貢献することを望みたい。

日露戦争後、都市部の新興中間層を中心に洋楽が幅広く浸透し始めた。演奏会、オペラが興行として成立し、プロの音楽家が現われ、日本人の創作や啓蒙書、輸入レコードの数が増えた。軍楽隊の日比谷公園音楽会に市民が集まり、吹奏楽が学校や街頭宣伝で派手に鳴らされ、お伽歌劇がデパートや学芸会や遊園地で上演され、ピース楽譜が美麗な表紙を競つた。こうした洋楽界拡充の原動力のひとつが、楽器・楽譜商が次々と創刊した雑誌だった。

「音楽」はその流れを洋楽界の総本山、東京音楽学校の学友会が汲み取つて発刊した雑誌で、単なる同窓会誌である以上に、〈上野〉から見た洋楽新時代の様子を克明に伝えてくれる。人気作曲家になる以前の中山晋平や、最初のベルリン留学に向かう山田耕作が文章を寄せている。今も歌われる歌の作者、たとえば吉丸一昌（「早春賦」）、相馬御風（「都の西北」）、梁田貞（「城ヶ島の雨」）、本居長世（「十五夜お月さん」）らが新作を発表し、ハンスリックの翻訳者、田村寛貞がドイツ音楽美学の紹介をし、学外からは太田黒元雄、牛山充ら音楽評論の祖が頻繁に寄稿した。

拾遺記

細川周平（国際日本文化研究センター・教授）